

# 夏秋野菜等の需要に応じた生産の推進について (令和8年度夏秋野菜等の需給ガイドライン)

令和7年12月

農林水産省農産局園芸作物課

# 野菜価格安定制度における計画生産・計画出荷の仕組み

- 需要に即した計画的な生産・出荷を推進するため、国は指定野菜について概ね5年ごとに需要及び供給の見通しを策定するとともに、年2回(冬春・夏秋)需給ガイドラインを策定。この需給ガイドラインを目安として、出荷団体等は、供給計画を作成し、計画に即した野菜の出荷に努める仕組み。
- 供給計画に即した出荷がなされるよう、指定野菜価格安定対策事業においては、供給計画と出荷実績との乖離度に応じて生産者補給交付金を減額する措置のほか、前年度の価格低落時における需給調整の取組実績等に応じて補填率に差を設ける措置を導入。

## 需要及び供給の見通し(国)

(概ね5年ごとに策定)

指定野菜の種別ごとに、概ね5年後の需要量、供給量、国内産供給量の見通しを策定

## 需給ガイドライン(国)

(毎年、6月:冬春野菜、12月:夏秋野菜に策定)

直近の需給動向等を踏まえ、種別ごとに次期作の需要量、供給量、国内産供給量の見通し、作付面積の指標を策定

## 供給計画(出荷団体等)

需給ガイドラインを目安とし、種別ごとに年2回策定(播種・定植前の当初計画、出荷前の確定計画)

## 指定野菜価格安定対策事業における措置

① 供給計画の作成を加入要件とする(契約野菜収入確保モデル事業を除く)

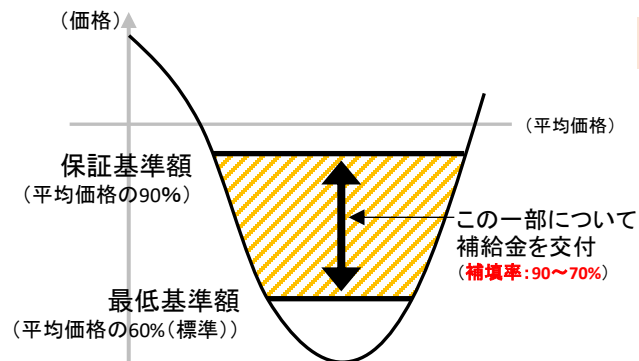
② 供給計画と出荷実績との乖離度に応じて交付金を減額

＜供給計画と出荷実績の乖離度合い＞

～	△60%	△50%	△40%	△30%	△20%	0	+20%	+30%	+40%	+50%	+60%	～
減額率 60%	減額率 50%	減額率 40%	減額率 30%	減額率 20%	減額なし		減額率 20%	減額率 30%	減額率 40%	減額率 50%	減額率 60%	

※ ±20%から±60%まで±10%間隔で乖離度合いを区分し、減額率は0～60%。

③ 過去3年の供給計画と出荷実績の乖離度や、緊急需給調整事業の取組実績等に応じて、生産者補給交付金の補填率を設定



## 補填率90%(産地区分Ⅰ)となる場合

以下の①・②の両方を満たす出荷団体

- ① 次のa又はbに該当すること  
a. 産地強化計画(加工・業務用推進タイプ)を策定  
b. 産地強化計画を策定し、直近3か年の計画的出荷割合が基準を満たす※
- ② 前年度において、対象品目の価格が緊急需給調整事業の発動価格以下となった際、対象品目の出荷があり、かつ、緊急需給調整事業を実施したこと

※ 直近3年の各年の計画的出荷割合 < 120/100、かつ、計画的出荷割合の直近3年平均 < 110/100

# 令和8年度夏秋野菜等の需給ガイドライン(概要)

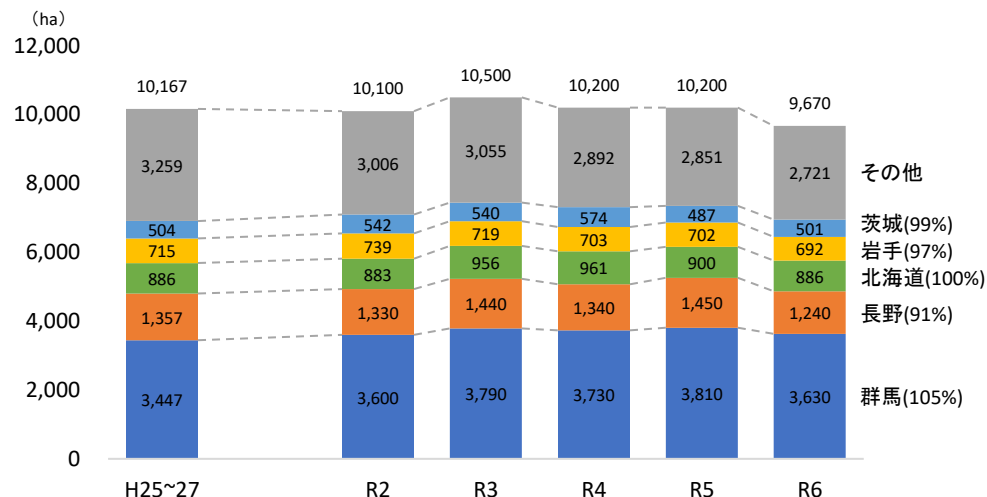
- 近年の需給動向や人口、単収等のすう勢を基に、有識者の意見も踏まえつつ、指定野菜に係る「需給ガイドライン」を策定。
- 令和8年度夏秋野菜等の需給ガイドラインでは、需要に応じた生産に向けて、現状のすう勢値を基に指標を策定。多くの品目において供給量が減少していることを踏まえ、直近作付実績に近い作付面積の指標を提示。なお、夏秋きゅうり、夏秋トマト、夏秋ピーマンなどの品目については、昨年夏季の高温の影響等により出荷量が減少し高値傾向となったことから、直近作付面積実績を上回る作付面積の指標を提示。
- 近年、夏季の高温の影響による生育不良等により、大幅な価格変動が発生していることから、計画に即した出荷が可能となるよう安定供給体制の構築が必要。

種別等		需要量 (t)	供給量 (t)	国内産供給量 (t)	作付面積 (ha)		
						直近年作付実績比	前年度ガイドライン比
夏秋キャベツ		337,800	478,800	473,300	9,670	100.0%	99.7%
夏秋きゅうり		241,500	265,000	256,000	7,130	106.1%	99.2%
秋冬さといも		124,700	157,800	123,700	9,260	100.0%	96.5%
夏だいこん		170,300	201,200	196,600	4,890	100.0%	94.0%
夏秋トマト		235,200	282,000	280,600	6,740	102.4%	97.1%
	うち大玉	188,500	226,000	224,900	5,220	102.6%	96.3%
	うちミニ	46,700	56,000	55,700	1,520	102.0%	100.0%
夏秋なす		149,800	173,300	172,600	6,610	102.0%	98.8%
秋にんじん		240,400	263,700	187,700	5,000	101.0%	99.6%
秋冬ねぎ		198,100	289,100	254,800	13,300	100.8%	97.8%
夏はくさい		123,600	154,700	154,500	2,170	100.0%	96.9%
夏秋ピーマン		62,800	77,800	68,900	2,200	105.8%	97.3%
夏秋ブロッコリー		47,300	114,100	66,500	6,820	—	—
夏秋レタス		205,500	252,600	252,300	8,170	100.0%	100.7%

# 夏秋キャベツの生産・価格等の動向①

- 群馬県産が全体出荷量の約5割を占める。10年前と比較し、全体作付面積は変動があるものの概ね横ばいで、全体出荷量はやや増加。
- 年によって変動があるが、加工・業務用に主に中国から毎年一定量が輸入されている。国内産供給量と比較するとごく少量。国産の不作時に代替として輸入量が増える傾向。

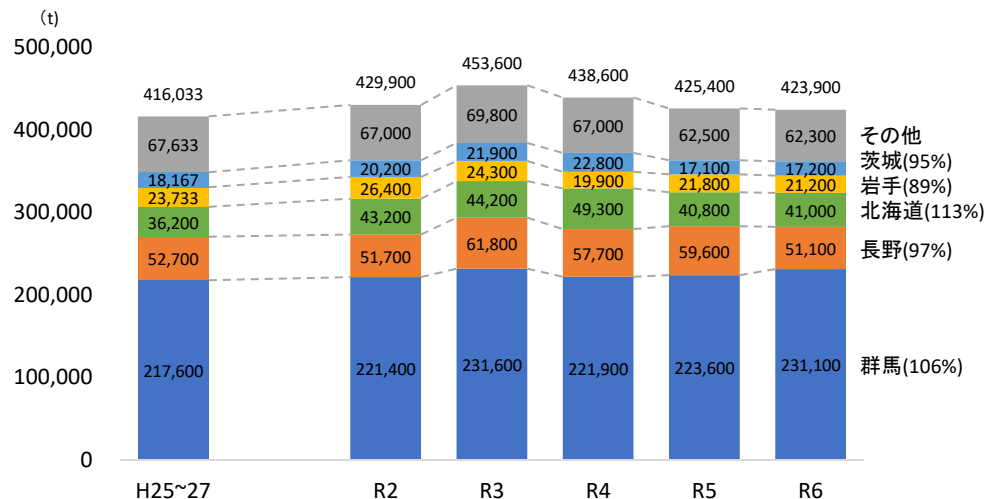
## 1. 作付面積の推移



出典：野菜生産出荷統計

※比率はH25~27年平均との比較

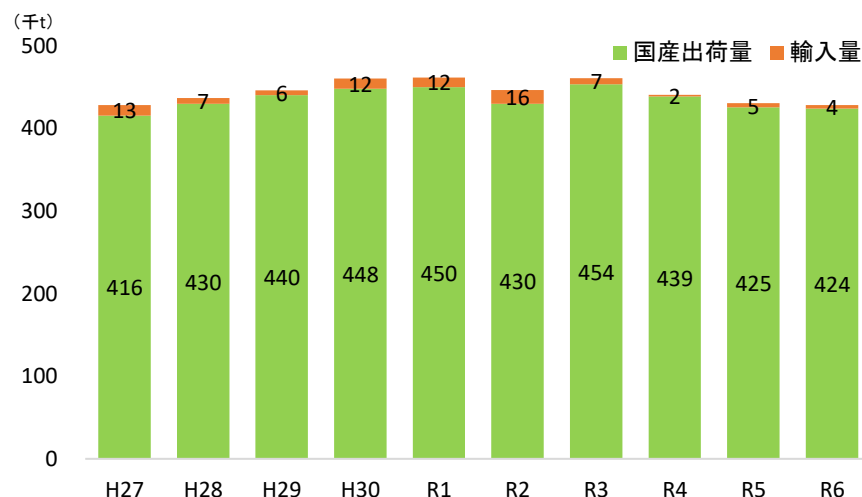
## 2. 出荷量の推移



出典：野菜生産出荷統計

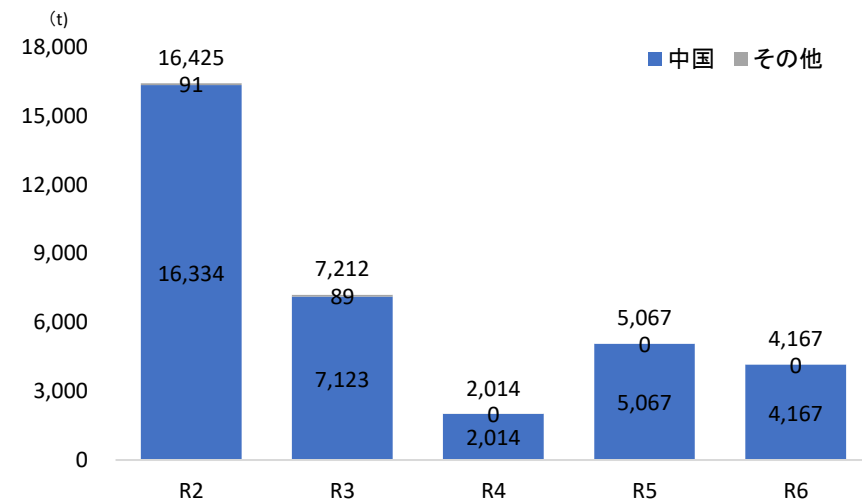
※比率はH25~27年平均との比較

## 3. 出荷量と輸入量



出典：貿易統計・野菜生産出荷統計

## 4. 輸入先国の内訳



出典：貿易統計・野菜生産出荷統計

# 夏秋キャベツの生産・価格等の動向②

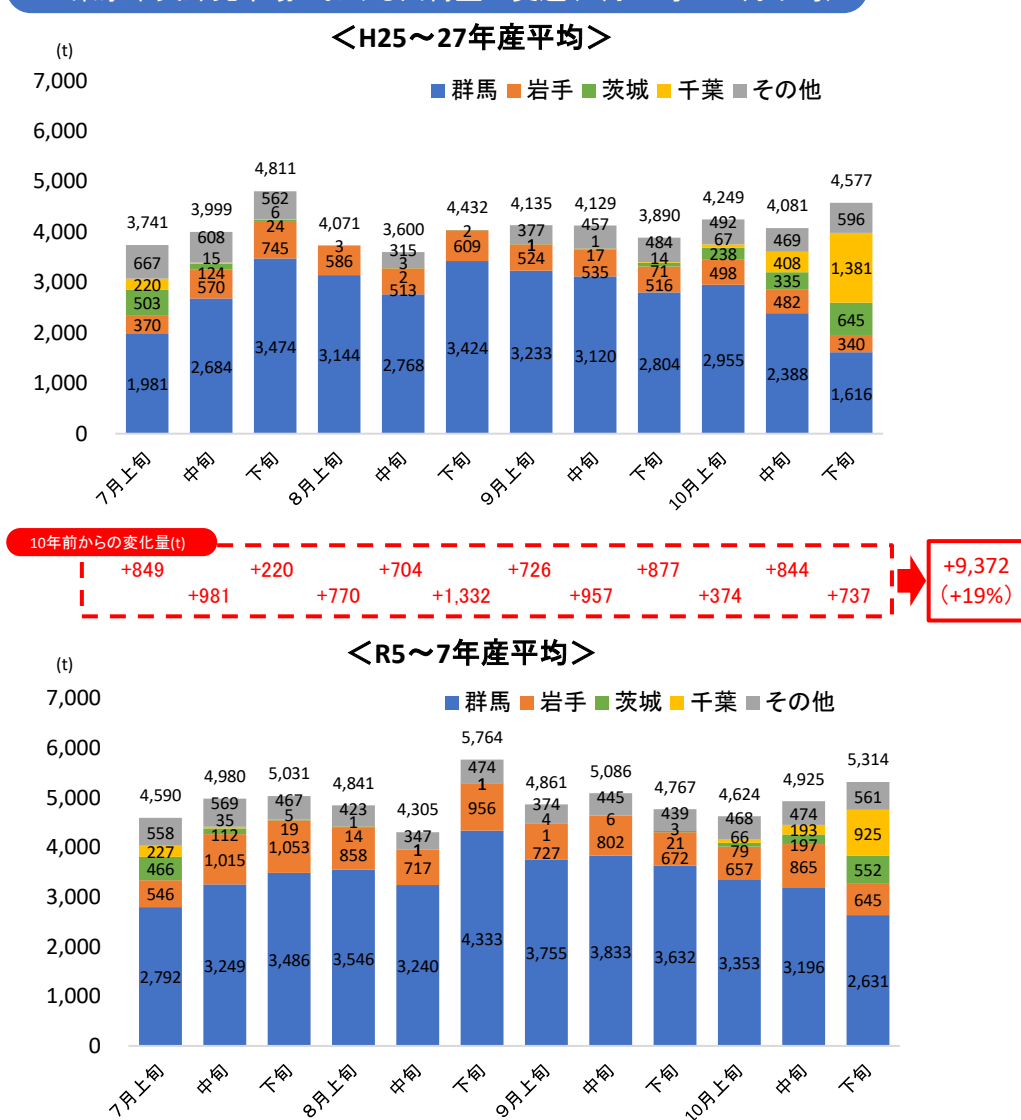
- 令和3年～5年は8月から9月にかけて価格が低迷し、3年連続で緊急需給調整事業を発動。
- 令和5年および6年は10月以降、夏季の高温の影響等により出荷量が減少し、高値となった。夏秋キャベツと冬キャベツの端境の安定供給が課題。
- 東京都中央卸売市場においては、10年前と比較し、出荷期間を通して出荷量が増加し、全体で約2割増加。

## 5. 東京中央卸売市場における価格と出荷量の推移



出典：青果物卸売市場調査

## 6. 東京中央卸売市場における出荷量の変遷（7月上旬～10月下旬）

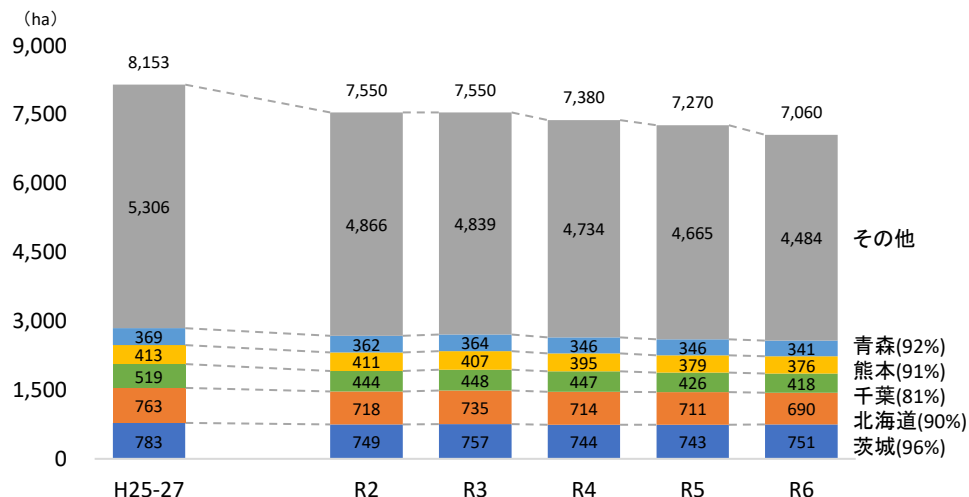


出典：野菜生産出荷統計

# 夏秋トマトの生産・価格等の動向①

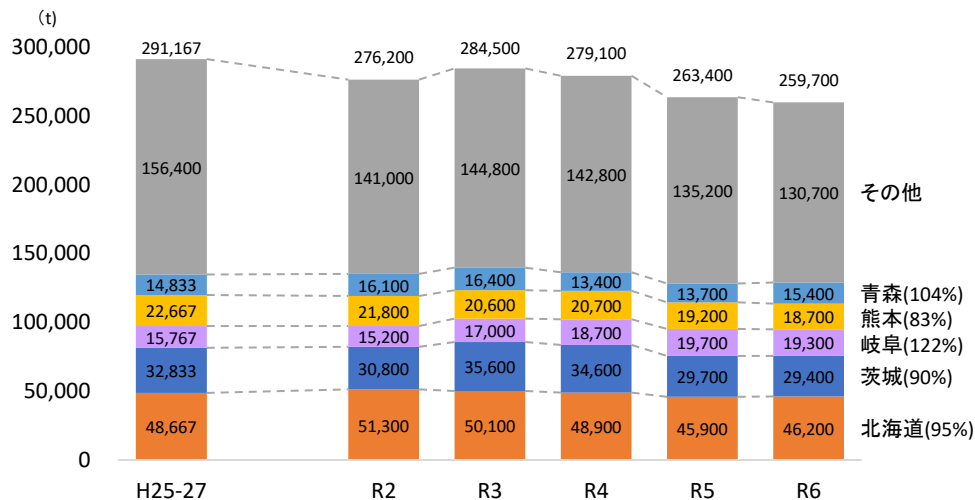
- 北海道、茨城、岐阜、熊本、青森で全体出荷量の約5割を占める。10年前と比較し、全体作付面積および全体出荷量は1割以上減少。
- 生鮮トマトの輸入量は国内産供給量と比較するとごく少量で、減少傾向。主に韓国、アメリカ、カナダ、ニュージーランドから輸入されている。

## 1. 作付面積の推移



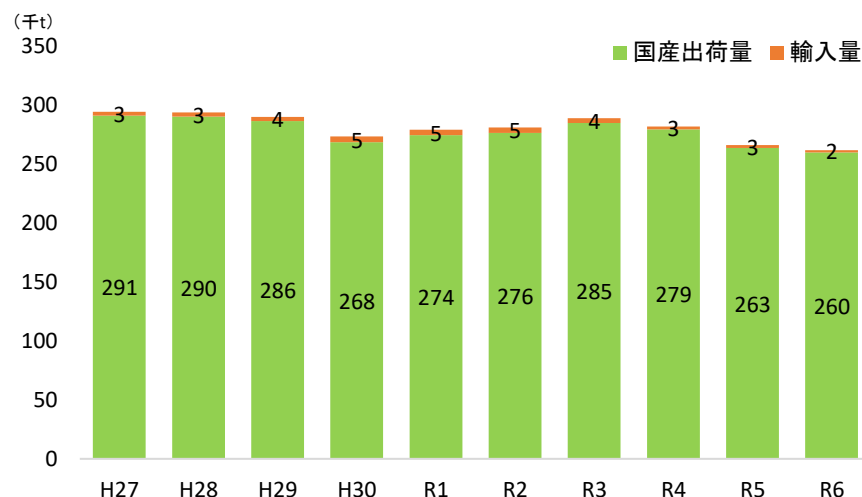
出典：野菜生産出荷統計

## 2. 出荷量の推移



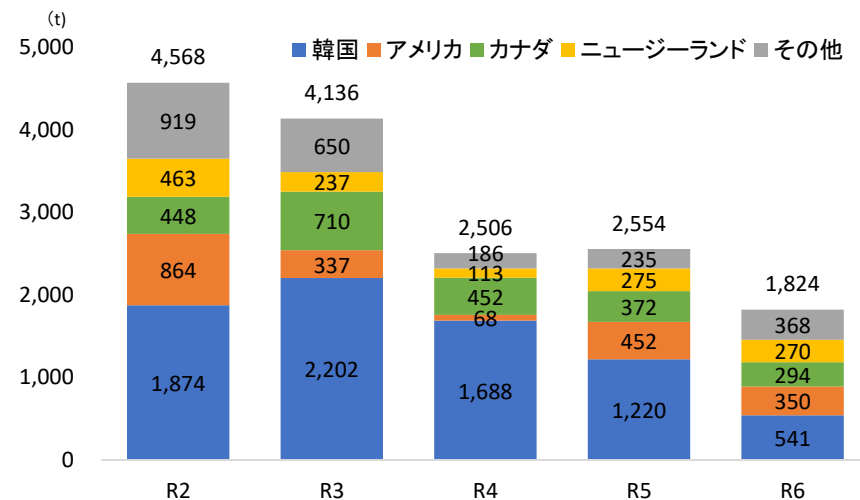
出典：野菜生産出荷統計

## 3. 出荷量と輸入量(生鮮)



出典：貿易統計・野菜生産出荷統計

## 4. 輸入先国の内訳(生鮮)

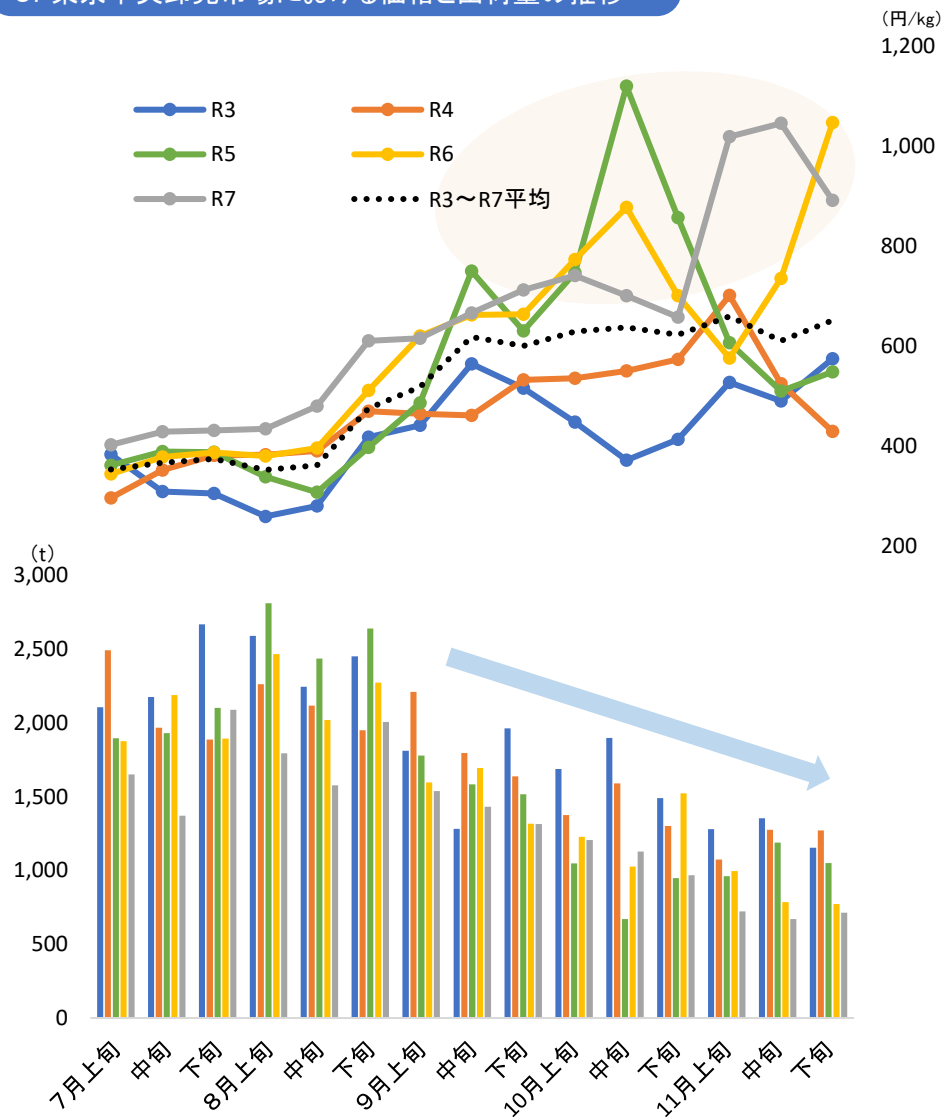


出典：貿易統計・野菜生産出荷統計

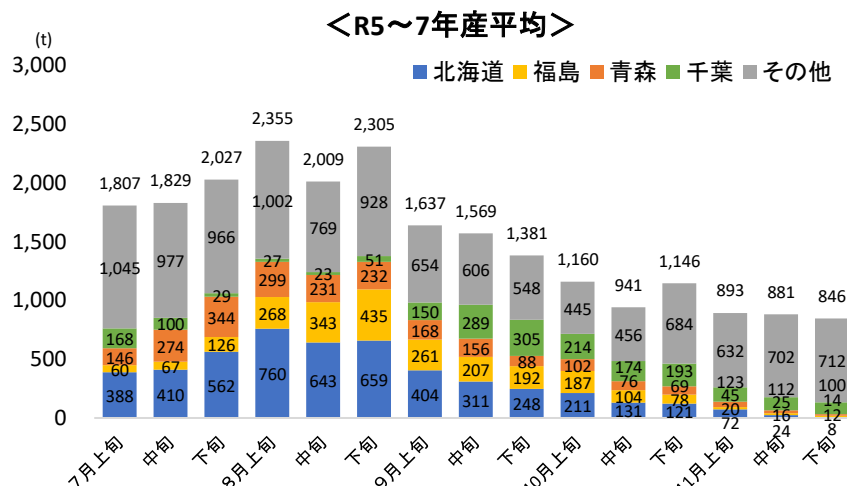
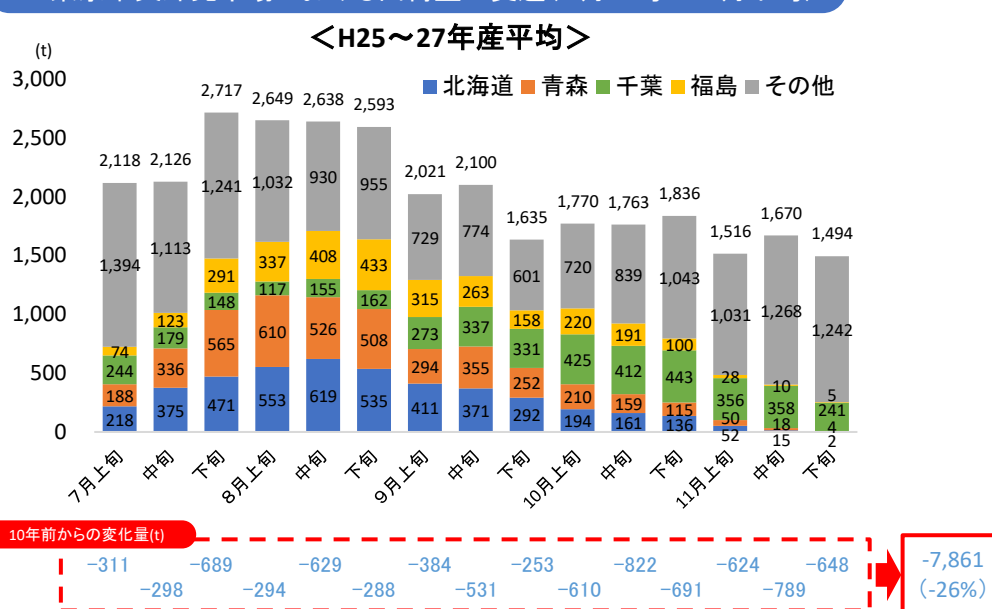
# 夏秋トマトの生産・価格等の動向②

- 9月から11月にかけて出荷量が減少し、高値となる傾向。特に令和5年は9～10月、令和6年および7年9月～11月にかけて夏季の高温の影響等により出荷量が減少し、高値となった。9月以降の安定供給が課題。
- 東京都中央卸売市場においては、10年前と比較し、出荷期間を通して出荷量が減少し、全体で2割以上減少。

## 5. 東京中央卸売市場における価格と出荷量の推移



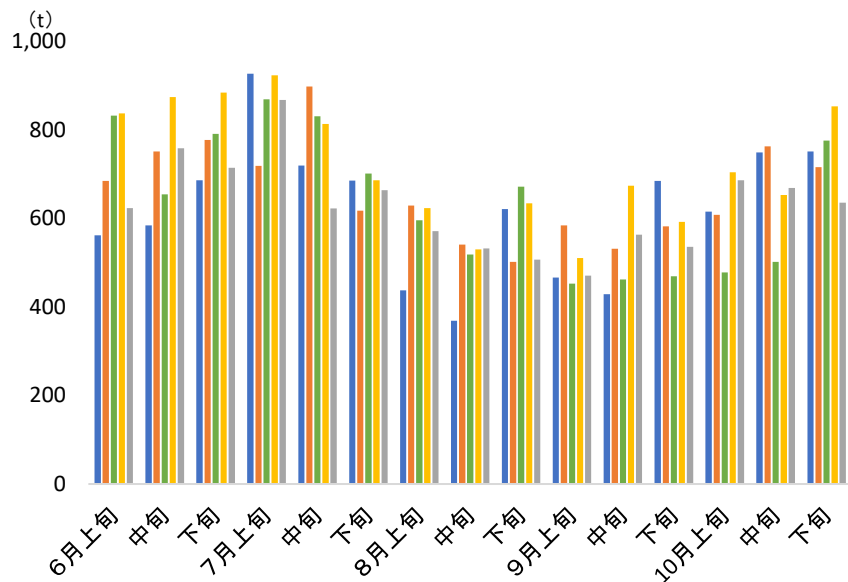
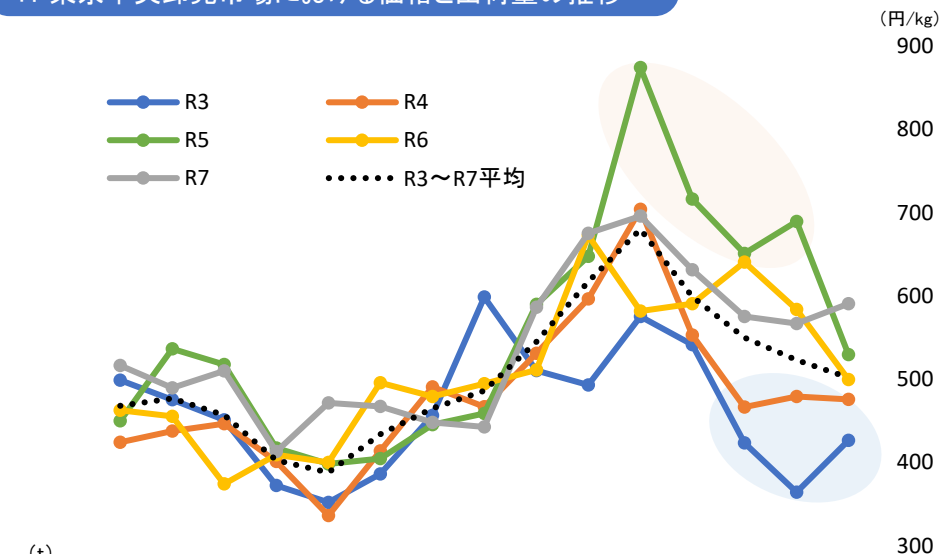
## 6. 東京中央卸売市場における出荷量の変遷(7月上旬～11月下旬)



# 夏秋ブロッコリーの生産・価格等の動向

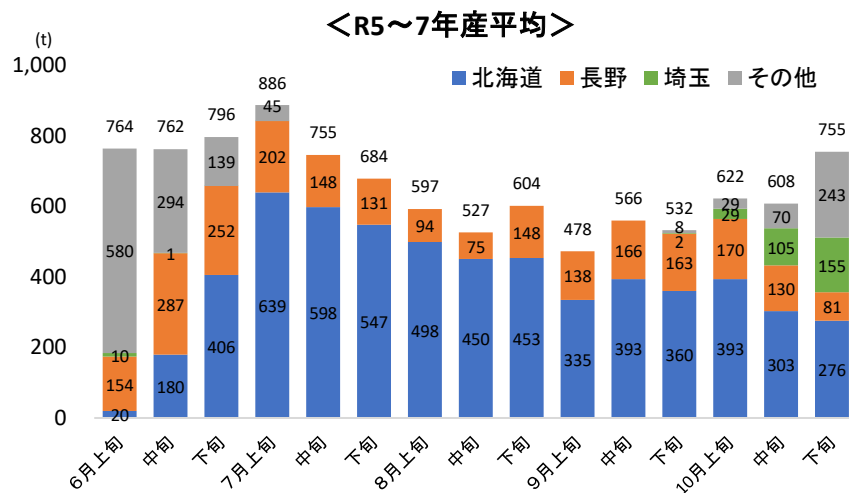
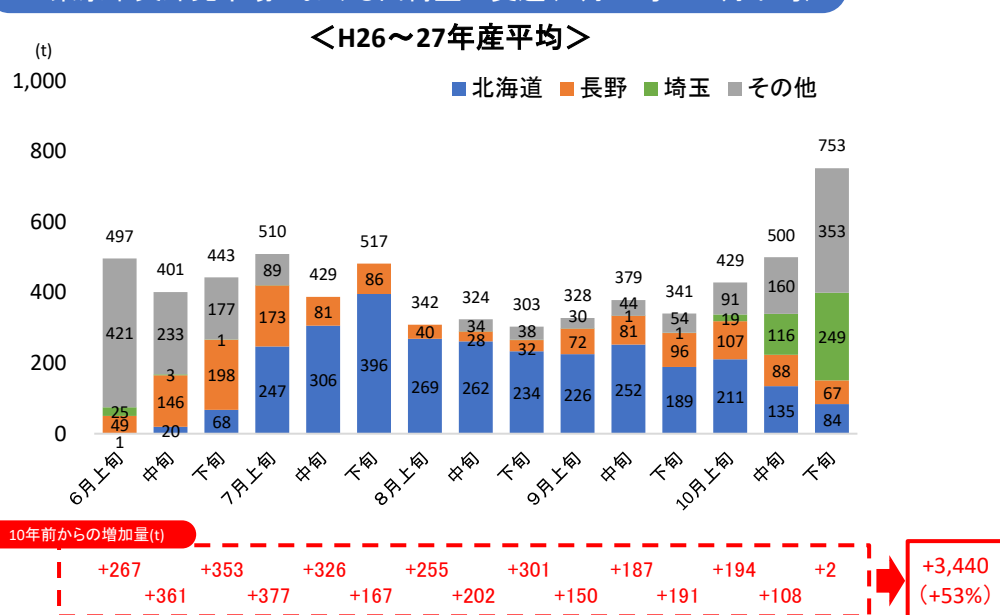
- 8月から10月にかけて出荷量が減少し、高値となる傾向。特に令和5年は9～10月にかけて夏季の高温の影響等により出荷量が減少し、高値となった。8月以降の安定供給が課題。
- 東京都中央卸売市場においては、10年前と比較し、出荷期間を通して出荷量が増加し、全体で約5割増加。

## 1. 東京中央卸売市場における価格と出荷量の推移



出典：青果物卸売市場調査

## 2. 東京中央卸売市場における出荷量の変遷(6月上旬～10月下旬)



出典：野菜生産出荷統計